

人権ネットワーク八幡

NEWS

事務局 〒523-0857 近江八幡市八幡町170(旧八幡教育集会所内)
 電話 【携帯】 080-2525-7114(高坂)
 【メール】 Tko.koj1224@yahoo.co.jp

<ARCHIVE/アーカイブ>

明日をつくる仲間<後編>
部落解放同盟八幡支部

表面的には、部落解放同盟のはたらきは、はなばなし。国や自治体に対してさまざまな要求をする。全国的な統一した力でその要求をかちとって行く。同和対策のいろいろな費用が、こうして獲得されたのだ。そして、地域にある同盟の支部は、この対策費が末端まで正しく行きわたっているか監視するし、それが十分でない場合、又独自の要求がある場合には、みずからの力で自治体交渉もする。

けれど、それだけがすべてではない。

「ワシな、学校卒業して勤めへ出たけどな、おもしろうて明けの日にもんで来てもうたんや。靴もやったけどな、これもパツとせえへんし。そやけどな、ワシ、同盟の人知ってよかった思うとるんや。この人たちといっしょなら、なんかやれる思うんや。ワシもこんどは、まじめにやっただ」

絶望と頹廃(たいはい)がすべてになろうとすると、そんなひとりひとりの胸のうちのことで問題にしなければならない。それに必ずしも部落の人たちのすべてが、解放同盟のやり方に賛同しているわけでもない。そして、同盟員みずからが、自分たち同士の中に対話が欠けたとき、運動全体が危機にひんすることも知っている。

部落解放同盟滋賀県連合会八幡支部の活動の中に、地元(近江八幡市)にある二つの教会の青年たちが仲間入りするようになったのは一昨年の3月だという。最初に部落に入り込んで、そこで生活をはじめたのは岡林信康君。きっかけをつくったのは、すでに部落伝道に意欲をもちつつあった東岡山治牧師(当時 堅田教会⇒長浜教会)であるが、岡林君の中にはすでに、火をつけられれば燃え上がる素材があったのだ。

「教会に部落の女の子が来たんや。その子が教会で盗みをしよった。そしたら、教会いうのは、そんなものの来るところとちがうという声が教会の中で起こったんや」

素材は、教会に対する素朴な疑問だったといえる。しかし、疑問が素朴であればあるだけ、純粋な若い心は燃え広がる。岡林君に続いて、部落で生活をともしする青年が生まれた。部落問題について考えることが、いつか、滋賀県の教会青年の重大な課題のひとつになった。

一昨年の夏には“解放キャンプ”と称して、部落の青年、子どもたちと、教会の青年の合同キャンプをした。いっしょに飯をつくり、食い、泳ぎ、遊び、そして夜遅くまで話した。部落の問題に対する無知と無理解が差別の根であることを知った。教会の青年たちにとっては、自分たちの信仰を現実的に再確認しなければならぬときだった。

今年の2月11日には、支部青年部の有志と教会の青年たちが協力して「反戦フォークソングの会」を開いた。町の小さな映画館に集まった青年たちは600名。会のあと、“紀元節復活反対”のデモには200名が参加。岡林信康君と、フォーク歌手高石友也さんが先頭に立った。滋賀県のいなか町の史上最初のデモだった。

部落解放同盟で、どうやって2月11日がたたかえるか、紀元節復活反対がたたかえるか、考えてみたんや。そしたら、肉弾三勇士は部落出身者やった。戦争で一番たくさん死んだのは、部落出身者やった、ということが分かったんや。

この部落の中で、岡林信康君は、人の心に訴え、人の心を結びつける強力な武器として“うた”があることを知った。彼は、全国の労音でうたう『友よ』『チューリップのアップリケ』を…。

ひとりの青年の言葉が忘れられない。「解放運動は、おのれが苦しむもんや、鈍行(どんこう)でもエ工、一生続けるんや」
(おわり)

* 今回も『月刊キリスト』の貴重な写真がら。荊冠旗の下に山下政男支部長・和泉先生(八幡小)・村田先生・東岡山治牧師が確認できました。



室町中期、土豪や百姓を率いて京の都に攻め込み、徳政を勝ち取った土豪の活躍を描いた歴史大作が公開されました。東映太秦製作所渾身のチャンバラアクション映画です。主演の大泉洋、彼の弟子となる長尾謙杜、さらに敵役の堤真一が格好良く描かれているのが東映時代劇のお約束。3人の大立ち回りのシーンは本当に見応えがあります。長尾謙杜の成長シーンは完全に少年ジャンプの乗り。そういえば一揆に絡む手下や敵役に「逃げ上手の若君」に出てくる様な隈取りをした人間が多く登場し、マンガチックな演出は少し興奮めました。

お上に刃向かう民衆のエネルギーの凄まじさが剣劇と共に描かれていて楽しかったです。一揆勢を鎮圧するため弓矢や槍、刀で攻めかかる権力側に路傍の石を集めて抵抗する姿は60年代末の学生運動の様でした。借用証文をみんなで焼き払うシーンが良かったなあ。もちろん時代劇のお約束、今回は佐波江浜(近江八幡)がいっぱい映っていました。

(水来亭平助)



〈無頼〉(パンフレットより)

1. 正業につかず、無法な行いをする者。また、その行為。
 2. たよるべきところのないこと。
- 「広辞苑」より



人権映画見て歩記

file 110

2019年、アフガニスタンで日本人医師の中村哲が銃撃を受けて死去しました。この報道で中村が医療活動のみならず、運河建設など多大な貢献をしてきたことを初めて知った人も多いと思います。2022年公開のドキュメンタリー映画『劇場版 荒野に希望の灯をともし』を見ると、それがどんなに凄いことだったかわかります。

1984年、中村は医師不足のパキスタンへ派遣されます。当時のパキスタンではハンセン病が流行しており、診療所には遠方から何日もかけて患者たちが訪れました。しかし治療薬がなく、目の前で子どもや老人たちが次々と死んでいく現実を目の当たりにした中村は、日本に「ペシャワールの会」を結成し、企業や個人に寄付を呼びかけます。集まった寄付金で購入した薬や食料を困窮地域に運び、多くの人たちの命を救ったのです。

中村の活動はさらにスケールアップします。当時パキスタンには、隣国アフガニスタンから難民が押し寄せていました。干ばつにより農地が砂漠化してしまったからです。中村は農地の再生が最大の解決方法だと考えました。しかし井戸はすべて枯れ果て、アフガニスタン最大河川のクナル河から水を引くしかありません。こうして「緑の大地計画」と名付けられたプロジェクトがスタートします。中村は独学で土木工学を学ぶと、地元の人たちと共に運河を掘り始めます。重機はなく、すべてが手作業でしたが、故郷に戻る希望に燃えたアフガニスタン人が手伝いのために続々と戻ってきました。やがて運河は完成し、いったんは水を引くことに成功しますが、今度はクナル河の氾濫でせっかく作った運河が土砂で埋まってしまいます。諦めることを知らない中村は、運河を掘り起こす作業の再開と同時に、氾濫に負けない堰の建築方法として、江戸時代の土木技術に活路を見出していきます。

こうした30年に渡る活動が映像に残されていました。それらが90分に編集され、砂漠を農地に変えていく壮大な映画となってスクリーンに映し出されます。これを実現させたのがたったひとりの医師だったことに驚くしかありません。でも「目の前の困っている人を放っておかない」という中村の単純明快な哲学は、誰でも実践することができるのではないのでしょうか。

(見て書いた人…渡邊幸平)

お願い

52円 ⇒ 85円

82円 ⇒ 110円

昨年10月、私たちが活動を始めてから4度目の郵便料金の値上げ(2回の消費税アップと2回の郵送料の改定)が実施されました。この値上げ、私たちの財政を少なからず圧迫します。デジタル年賀が増える中ですが、書き損じはがきや不要になった未使用切手があればご寄付いただくと助かります。お願いします。